

名作再読、拾い読み(5)

『代書人バートルビー』 ("Bartleby, the Scrivener") 小澤 文彦

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-1891) は、ニューヨークの裕福な輸入商の3男として生まれました。11歳の時に家が破産し、母の実家を頼ってニューヨークを去りますが、13歳の時に多額の負債を残して父が死去。ハーマンは学校を中退して働き始めます。様々な職を経験したあと、21歳で捕鯨船アカシュネット号に乗り、ニューイングランドの港から南米のホーン岬を回って太平洋に出ます。この当時、主として灯油の原料を求めてですが、アメリカの捕鯨業は他国を圧倒するほど盛んであり、重要な国家的産業の一つでした。1年半の航海後、南太平洋のマルケサス諸島で仲間と共に脱走し、食人種とされていたタイピー族と共に3週間過ごします。その後また他の捕鯨船に乗り込んでタヒチやエイメオなどの島を転々とし、ハワイで米海軍の水夫に採用されて25歳の時に合衆国に帰還します。

1846年にタイピー族と暮らした経験をもとに『タイピー』を出版したところ大好評を受け、翌年タヒチでの経験をもとに出版した『オムー』も好評を博しました。しかし第3作『マーディ』は不評となり、これ以後の作品はほとんど受け入れられなくなります。生活に追われながら細々と小説や詩を発表する状態が続きました。1866年に漸くニューヨーク税関の仕事を得ますが、長男マルコムの手銃自殺、自宅の火災による焼失、次男スタンウェイの出奔と次々と不幸が襲いかかります。最後の傑作『ピリー・パッド』が完成した1891年に72歳で死亡。作家としては既に忘れ去られた存在だったため、親類縁者の他ごく僅かの人々が参列しただけの寂しい葬儀でした。

メルヴィルという名と真っ先に『白鯨』(1851)が挙げられます。捕鯨船に乗った経験をもとに描かれた雄大な構想の海洋小説ですが、発表当時は余り高い評価は受けませんでした。白鯨モービー・ディックと、その鯨に対して異常なまでの復讐心を燃やすエイハブ船長との3日間に亘る死闘を描いた作品です。発表後70年経った1920年代になって漸く再評価されるようになり、今では彼の傑作と認められています。『白鯨』の後、『ベニート・セレーノ』や『避雷針りの男』などの中短編小説を雑誌に発表していますが、その中から『代書人バートルビー』をお薦めしたいと思います。

(あらすじ)

ニューヨークのウォール街にある法律事務所では、仕事が忙しかったため、新しく代書人を募集したところ物静かな感じの若者バートルビーが応募してきます。仕事ぶりは熱心で優秀。コピー機が無い時代の話ですから、字体が綺麗で速く正確に書ける人が大切でした。また、電灯も無い時代なので、日中は太陽光、夜はロウソクの光で遅くまで頑張るバートルビーは、事務所経営者にとって、大変好ましく頼り甲斐のある代書人でした。それまでは、午前中は勤勉でも午後になると注意力散漫になり書類にインクのしみをつけがちな60歳近いターキーと、午前中は苛立ちやすく神経質ですが午後になると温和な性格に変わる25歳くらいのニッパーズで仕事をこなしていたからです。

しかしある日のこと、バートルビーは書類の照合作業を拒否し、それ以来全ての仕事を断って事務所にただじっとしているだけの存在になります。断る時の口癖は、"I would prefer not to" (せうにすめばありがたいのですが) です。暫くして、バートルビーが勝手に事務所に寝泊まりしていることが判明します。経営者は、バートルビーに仕事をしないのなら解雇すると優しい口調で言いお金も渡すのですが、彼が相変わらず居座り続けるので、経営者は事務所を他の場所に移します。

暫くして、バートルビーが部屋から追い出されたのに、日中は建物の手摺に座り込み夜は玄関で寝ていて困るという連絡を受けます。説得しに出掛けて行き、色々と親切な提案をし、最後には自分の家に来るように勧めるのですが、バートルビーは全て断ります。

結局バートルビーは"Tombs" (墓場) と呼ばれている浮浪者収容所に連行されたことがわかり、経営者はそこへ面会に行きますが、バートルビーは相変わらず頑なな態度をとり続けます。数日後、また面会に行ったところ、バートルビーは食事もとらずに孤独なまま中庭で死んでいました。

カフカやカミュの描く不条理の世界はよく知られていますが、それより50年も早くメルヴィルがこのバートルビーで取り上げていたことに衝撃を受けます。バートルビーがあらゆることに拒絶を貫く姿は、異常というよりも却って気高く神々しくさえ感じられてきますが、執念に取り憑かれたかのように死に急ぐ孤独な態度は、後々まで心を捉えて離しません。

参考図書(1) 『代書人バートルビー』 酒本雅之訳 (国書刊行会, 1988)

(2) 『バートルビー、船乗りピリー・パッド』 北川悌二、原田敬一共訳 (南雲堂, 1960)

(3) "Shorter novels of Herman Melville" (Liveright, 1942)

(4) "The piazza tales" (Constable, 1923)

おざわ ふみひこ (係・情報サービス課)